

## アフリカに進出する 中国

狩野 修二

中国は自国の経済的発展にともない、海外からの投資を受ける側としてだけでなく、海外への投資を積極的に行うようになってきた。1990年代の前半から政府により中国企業の海外進出が奨励されはじめたが、近年その投資先として注目を集めているのがアフリカである。こうした投資には、政府の支援を受けた国有企業によるものから、民間企業、個人事業主などさまざまなものがあるが、投資を受ける側のアフリカ諸国にはプラスの面とマイナスの面があることが報じられている。ここでは、比較的最近に刊行された書籍のなかから、アフリカへ進出する中国に関する書籍を紹介する。

そもそも中国がなぜアフリカに投資するのか。平野克己著『経済大陸アフリカ：資源、食糧問題から開発政策まで』（中央公論新社、2013年）によれば、「世界の工場」として発展してきた中国では、資源エネルギーの需要が膨らみ続けており、たとえば石油消費は1990年以降年率7%増加しているという。このほかにも鉄鉱石をはじめとする鉱産物の需要も拡大しており、今後の経済成長維持のためには国外での資源権益確保が必要となっている。そのターゲットの一つがアフリカであるという。中国は2000年に初めてアフリカ45カ国の元首および閣僚を招聘し「中国アフリカ協力フォーラム」（FOCAC）を開催、以後3年おきに同フォーラムを催している。2006年のフォーラムでは「北京宣言」が合意され、援助や優遇貸付、債務免除などが約束され、アフリカ諸国との結びつきを深めた。

こうした結果もあり、中国企業が次々とアフリカへ進出していくことになるが、「NHKスペシャル」取材班著『アフリカ：資本主義最後のフロンティア』（新潮社、2011年）によると、中国がアフリカで設立した企業は中国政府が公認しているだけでもこの時点ですでに1600社を超えているという。ここでは、そのうち

の事例として、エチオピアに進出し、エチオピア全土の通信ネットワーク整備を行う中国企業が紹介されている。また、こうした大規模な事業を受注できる要因として、大卒の技術者と、政府からの資金双方の確保が可能であることが挙げられている。

ダンビサ・モヨ著、朝倉慶監修、奥山真司訳『すべての富を中国が独り占めする：これからの資源外交戦略を読み解く』（ビジネス社、2013年）では、中国の資源確保の方法について3つの方法があると指摘している。1つは鉱山を買い取るといったような直接的な方法。2つ目は、スワップ取引と呼ばれる方法で、たとえば石油のパイプラインを建設する代わりに今後20年に渡って石油の供給を受けるといった取引。3つ目は資源関連会社の株式を購入し、間接的に資源へのアクセスを得るといった方法である。

こうした手段は表面上特に問題がないように思えるが、批判的な意見も少なくない。アフリカの資源に恵まれている国と中国の間では、贈賄による取引があり、また投資された多額の資金についても一部のひとに独占されているという。トム・バージェス著、山田美明訳『喰い尽くされるアフリカ：欧米の資源略奪システムを中国が乗っ取る日』（集英社、2016年）では、中国の一企業グループがいかにアフリカの資源国の権力者とつながり、富を得ているかについて調べあげている。資源から得られる利益は、投資国である欧米や中国、そして資源国の権力者によって独占され、資源国の国民にはあまり還元されない。こうした現状や仕組みについても詳しく述べられている。

アフリカへの進出という国を挙げての大きな流れのなかで、中国の一般民衆のなかからもこれをチャンスとみて移民するひとがいる。こうした移民は、市場で日用品を販売したり、食堂をひらいたり、農地を開墾するなど、現地の生活により密着した事業を展開している。ハワード・W・フレンチ著、栗原泉訳『中国第二の大陸アフリカ：一〇〇万の移民が築く新たな帝国』（白水社、2016年）では、こうしたひとが今後アフリカでどのように行動し、現地の人びとと交流していくのが、中国のイメージと広い意味での中国とアフリカの関係性を左右していくであろうと考え、彼らの事業とアフリカの人びとへの考えを10カ国に渡り取材している。

（かのう しゅうじ／アジア経済研究所 図書館）